Book Review 36-11 暗殺者　＃破砕

『＃破砕』（ク・ビョンモ著）を読んでみた。Book Review 36-5 で扱った『＃破果』の外伝・スピンオフ短篇である。

著者は、韓国人作家。リアリズム小説、SF、ファンタジーなど、ジャンルを超越した多彩な作品を発表し続けている。

『＃破果』の主人公は 65 歳の女殺し屋（殺し屋稼業一筋で 45 年間）である。彼女が殺し屋の仕事を始めるための殺人訓練の様子が語られる。約 1 カ月にわたる山にこもっての師と共に死と隣り合わせの最終訓練に臨む。殺し、生き延びるための訓練が延々と語られる。特に敵と戦うようなシーンもない。本書だけを読むと何だと思いかねないので、本編である『＃破果』を読む必要があろう。

さて、暗殺者の小説をまず挙げるとすれば『＃暗殺者』（ロバート・ラドラム著、1980 年）であろう。学生時代に読んで、今でも忘れられない作品である。『Bourne Identity』という題名で映画化もされているが、小説には及びもつかない。これを契機にロバート・ラドラム作品を読み漁った。
瀕死の重症で海から救助された記憶喪失の男。身体の傷が癒えてから自分の素性を知ろうと各地を探索する。スイスで、自分の名前が J・ボーンだと判明する。自分の過去が次第に明らかになってゆくにつれ、ボーンは自分の恐ろしい正体に悩む。そして米国の CIA、ペンタゴンなど国家の陰謀と策謀が渦巻く世界へとのめりこんでゆくのだった・・・。

もう一冊追加するとすれば『ジャッカルの日』（フレデリック・フォーサイス著）である。大統領暗殺を企てる武装組織（OAS）が雇ったプロの暗殺者「ジャッカル」と、大統領暗殺を阻止しようとするフランス官憲の追跡を描いた小説である。エドガー賞を受賞（1972 年）。後年、実際の暗殺者の中にも本書を愛読したものも多くいたそうだ。読み始めるなら、徹夜覚悟でどうぞ。『ジャッカルの日』（フレッド・ジンネマン監督、1973 年）として映画化もされている。

かたぐるしい政治・経済の解説本を読むよりもサスペンス小説の方がズーと政治・経済の理解が深まるような気がするのは私だけであろうか。